京都府川端警察署長賞

犯罪と私達

京都市立岡崎中学校二年　早樫　彩葉

みなさんは、加害者という立場になったことがありますか。そのときはどんな思いを抱いていましたか。

犯罪を犯してしまった人、加害者になった人達の中には、助けを求めていた人達もいると私は思っています。

生活をしたり、社会に出たり、学校生活をおくっていたり、と生きているなかで、つらいことがあったり、苦しかったりと、生きづらさを感じることがあると思います。そんな小さなことが犯罪や非行につながる大きな闇の扉となります。このとき、鍵となるのが周りの人達です。手を差し伸べてくれる人がいれば光の扉を開くことができるでしょう。しかし、発信しているSOSの声に気づいてもらえず、助けてくれる人がいないと闇の扉を開けてしまうことになります。また、中には「助けて」とSOSを発信できない人もいると思います。そんな人達が犯罪や非行の闇に入っていってしまわないためにはどうすればよいのでしょう。私はこれまでの自分を振り返ってみました。

生きていくうえで、困ったことや誰かに助けを求めることは誰もがあると思います。私が学校であったつらい出来事を家族に話すと、寄り添ってくれます。困っているときは、友達が支えてくれます。私のSOSに気づいて、助けてくれる人が周りにたくさんいる。これは、とてもありがたいことなんだなと改めて思いました。

そうやっていつも見てくれている家族、友達、周りの人達がいるからこそ、私には安心安全で楽しく過ごせる環境があるんだなと気づかされました。また、そんな環境があるというのは当たり前のことではないんだとも気づかされました。そんな安心できる環境をつくるつながりが大切だと思います。

また、犯罪を犯した人が社会に戻ってきたときに、冷たい目を向けるのではなく、周りのみんなで支えることが大切だと思いました。犯罪を犯してしまった人だって私達と同じ人間だから、心があります。犯罪者という冷たくなってしまった心をみんなの温かさで溶かすことで、社会の一員に戻れると思います。

そして、私は周りにいる困っている人を助けます。そんなこと当たり前だと思う人もいると思います。しかし、助けてほしい人の中には「助けて」と言えない人もいます。私はそんな声にならない「助けて」を拾って、手を差し伸べてあげたいです。世界中の人を助けることはできないけれど、まずは私のことを支えてくれている、大切にしてくれている人達のことを大切にし、私も支えていけるようにしたいです。私達も犯罪を犯してしまった人達も同じ人間だということを忘れず、手を取り合うことこそ、犯罪や非行をなくすための第一歩になるはずです。